

真茶引山種

序

茶道

原

明彦 卷下

唐土より傳へて

國法既び種々

あり常々是を嗜む

の禮儀次第

法を立く

予ふ其世々乃好士

道々つみまれども態

或異はしる支派分

其徒久遠の星は

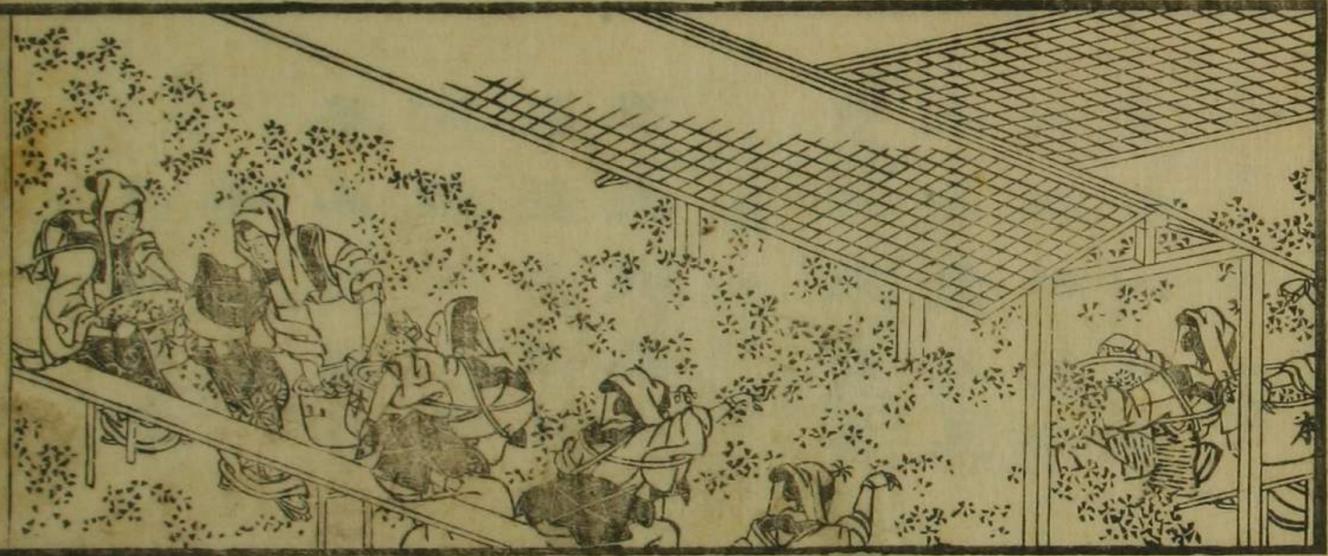
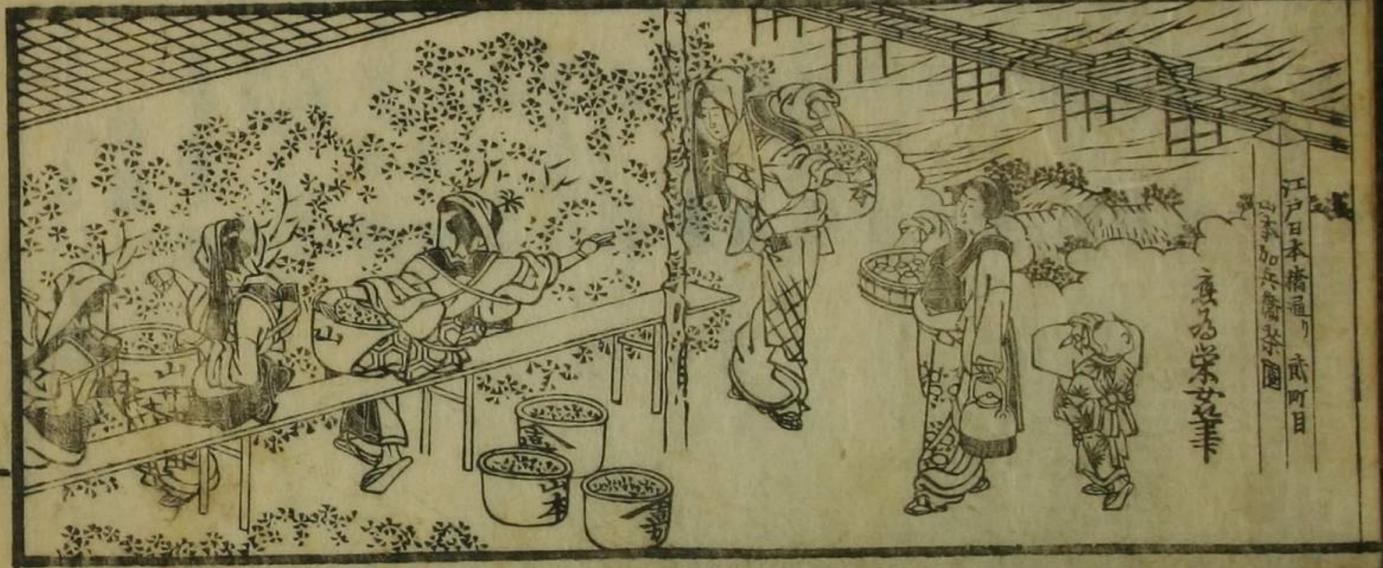
月空花乃詠

酒香ぬ人を評

愛敬せり然る別ふ
 茶葉といふて平々
 茶葉箱のつら楽堂
 せしや世子よ願ふれを
 学まなぶ人多く是こゝも
 其式そのしき定さだまりて原もと更さらと
いふものありぬ
 如ごとく今いまも大おほ既すで成なり
 徳とく運うん手て種たねと影かげ也なり
せうしや小冊せうしやと初はつ心しんの一いつ冊さつ也なり
いふものありぬ
 毎まい日にち之の様さま本ほんに壽じゆ々々
 卷まき端はたよりいふて解とく解とく
 とありぬ
 於お純じゆん評へい
 山さん本ほん主人しゆじん誌し
 序

茶事引の種 目録

茶事咏
 茶式
 古茶
 茶の始
 茶の効
 茶の採
 茶の目
 茶の蔵
 水すい病びやう
 器き採さい
 分ぶん炭たん
 陽やう候こう
 莫もく法ぽう
 淹えん茶ちや
 清せい茶ちや
 附つ録ろく



明人茶事
咏

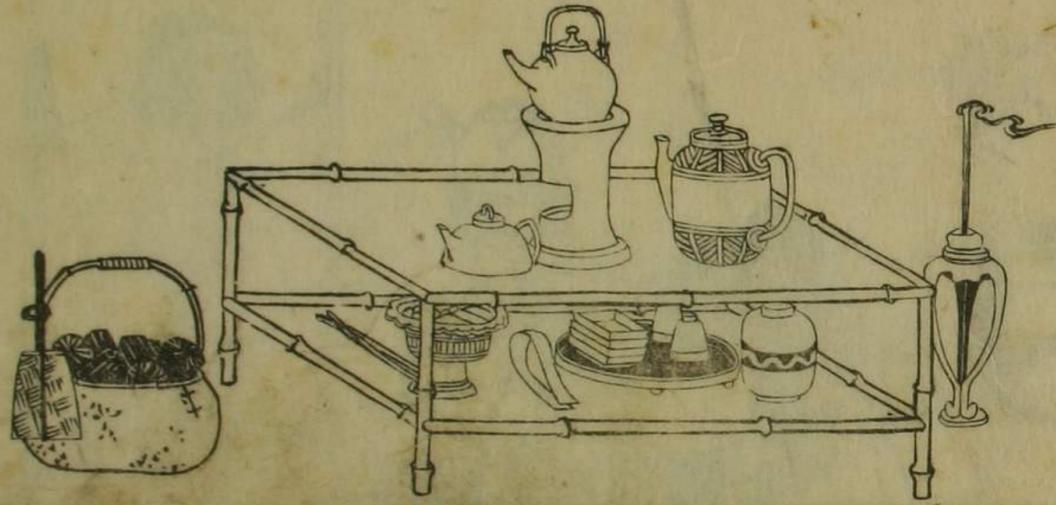
茶品在塵外
所須人出塵
茫茫塵眼醉
誰是啜茶人

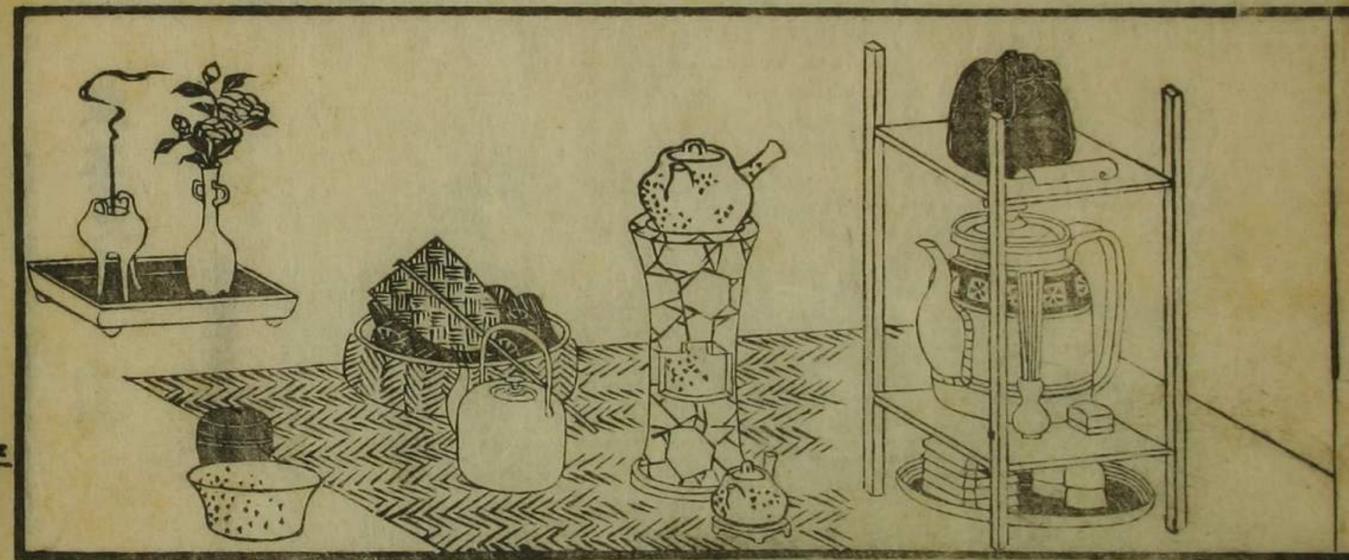
其二

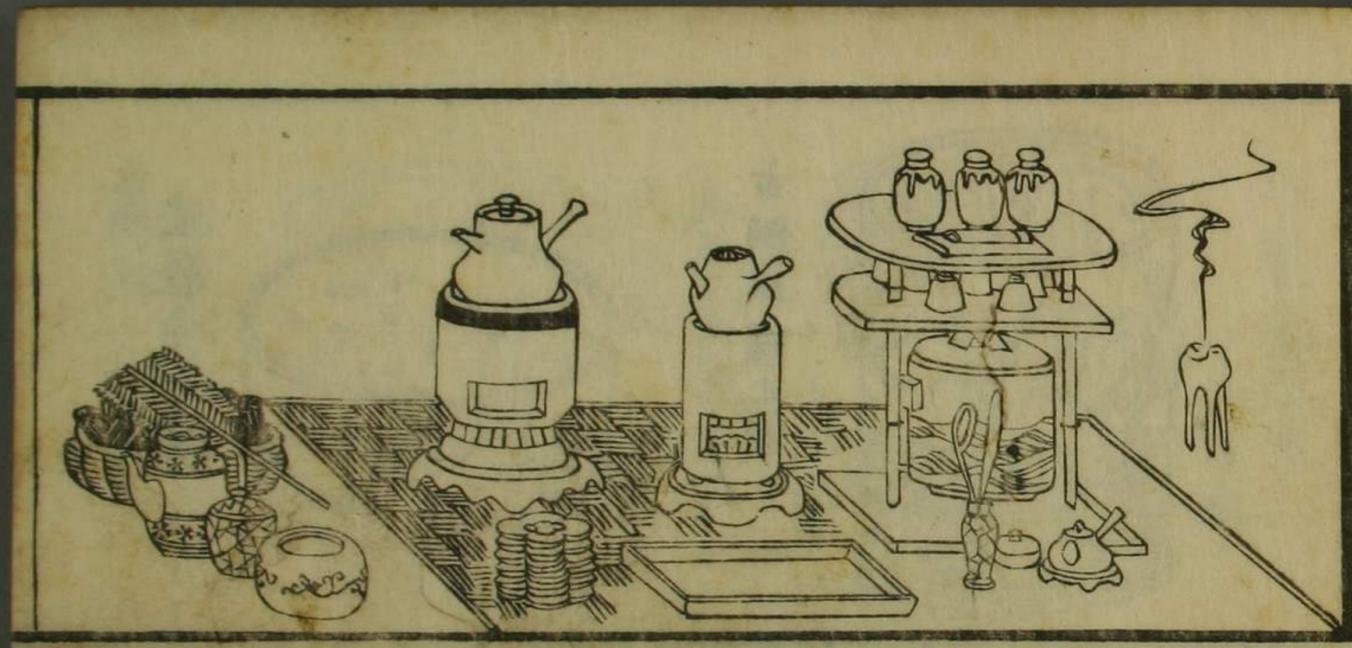
奠水不煎茶
水高發茶呆
大龍餅杓間
要有山林氣

印

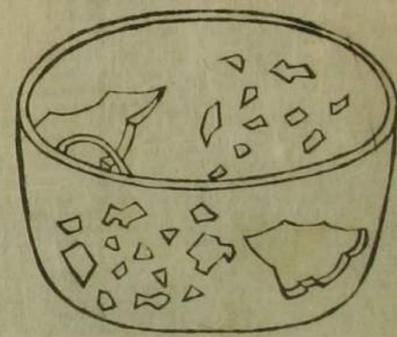
煎茶之式







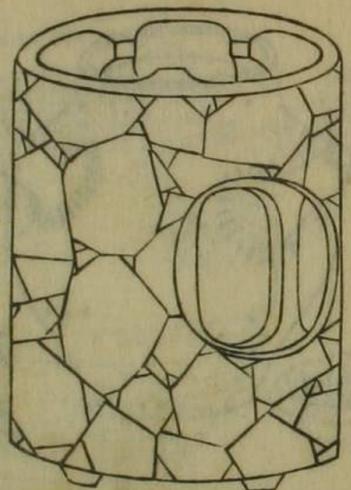
大和
法隆寺所藏



古銅風爐之圖



唐製風爐圖
一云涼盤

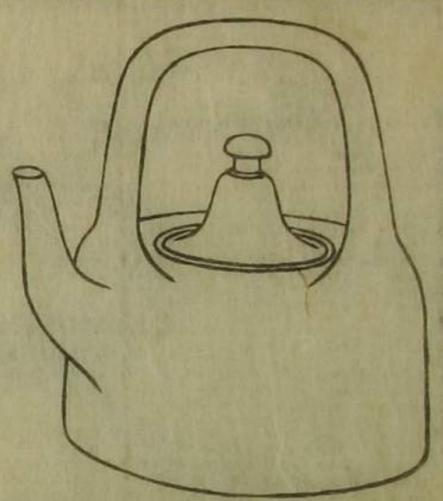


真音彙韻
火灶圖



即本邦秋田所製
風爐畧近似之

茶壺圖
見真音彙韻



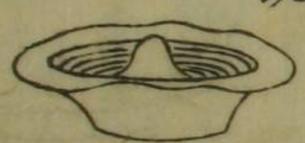
賣茶翁藏
唐製



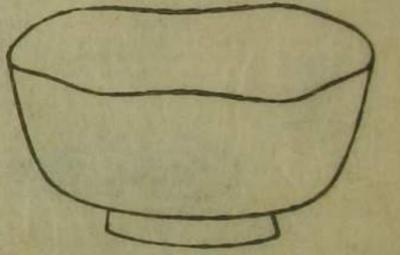
茶瓶之圖
今藏在燕葭堂



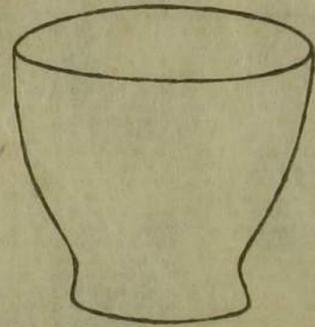
南蠻茶瓶圖
鷓居珍玩



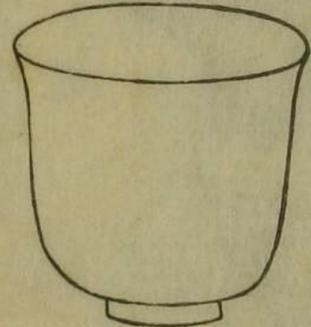
盆



鐘



甌



茶の始

夫茶の東方の嘉木也其を
 延病を治する仙薬あり之を
 神魂をそそぎて七碗仙靈
 小圃にとも林せる和漢古今
 是哉樂しむ人知そ今にいと
 海ありて漢土まで上る茶と
 以て三種あり其中小苦茶
 といふが今の茶ありといふ
 詩經小雅謂茶苦茶甘如
 飴○又莖茶如飴木の根は
 びりけ灸灸ふとされ甘味
 生ざる有るなり亦雅小攢の
 茶ありといふ郭璞が注す
 樹小如梔子○冬生葉可煮

陸羽の茶経に今早煎茶を
晩取為茗或曰薛○蜀人名
此とこれを苦茶といひり
二種の秋冬とて蒸穢の州
て食器にゆらば茶の字
余ハ上古苦余たゆて
食品に之を洗ふ古其茶を
食せば茶の字を以て
是を煎飲する王二玉の時
吳の韋曜茶を好みて孫皓
是に茶葉を以て酒に代て
ひりりり西晉の王湛人
此が先茶を飲む士大夫
とこれを苦茶といひ漢の代
史記に司馬相如物雅木

茶の名あれども其細あり
その味えは依りて魏晉の
飲りて之を飲せし
初るべし中々晉の杜毓が
莽賦を依りて茶飲は
賞玩せる始ありて
玉廩億約は帝大級積
武陽買茶といひ張花楷
物志に生茶をのむ人を
て取て茶飲を煮る
人ありてこの人も
茶人もありともあり
唐の代よりして
玄宗の天室中茶仙座

羽世に於て南宗代宗の同
於此小定く茶經三篇
を著し烹飪の法別を立
器を製し水味を痛せし
る天下の人茶飲乃清雅
を知りあましく羨望せ
しつゝ風流華人も
あり次て於此茶經三篇
劉禹錫亦出てすすり
つゝ温庭筠が採茶録有
まゝ張又新煎茶水記を
何より一書茶訣有り
陸龜蒙皮日休茶中十
線の唱和あり正介
人の詩賦歷代名家乃

著述あげて計一が
為清浄信より唐時茶
録しつゝも惟湖洲の
茶省録其れ今茶省ハ
顧渚山不生於湖者二郡の
間あり採茶の時小
為那の太守あましく
尤盛令より杜牧が詩に
採茶傳蜜棹旌旗半
翠峯。劉禹錫が詩より
何處人言似仙燒春山
携妓採茶時と云ふても
當時の光景悉ひし
宋の代より知りし
んありて大祖開室中

龍園と造るるは唐人法
用ふ別つは後丁禪茶
裏小龍園小鳳園を造る
官園私園大に異けり
時代より茶あり
茶ハ茶枝摘み一掃て
と形 多うて末とあり
和の代より始り
て茶葉を用ひしは
茶終小廢しし
碾碾の末にありし
茶葉を扱下優油紙を
加ふ由來佳品にあり
茶茶より多うて
天然のものあり

揚子江の茶葉を
美するは
本朝あり
桓武天皇廿三年傳教
大師遣唐使入
唐之月廿九年納せり
天台の法を納りて
經佛像を納りて
茶子將來せしと云
とも茶子將來し
日吉の社 其後
後醍醐天皇の法字弘仁
六年四月を江の國
の崇福寺に御尊あり

七きより徳教あり
興を修められしとて此
時大信正永忠みづる所
茶を煮て甘きうといふ
るもえさう又敵岳の種
養ありといふ信教茶子
將來の友をゆつていふ
あるぞ

日年六月に畿内ありて
江丹波播磨木の玉
作せし茶を種も首の
信しめありし類
國史 帝王のふあるされし
弘仁六年の唐の憲宗元
和十年に造り造唐使

士

其小僧徒の徒来毎
ありしにあらば茶も
ありし信え来きるある

宇多上皇は落後の日
醍醐天皇仁和寺へ御
幸ありて茶の袋を
りしとて花を好む
若菜ふゆり梅り

日本紀畧より昌泰二年
十月に落後文戒に
東寺ありしとて日
正月上皇御勤式日
相を始り陪從の人と侍
被をせしありしこと

又えさう野耐酒巖
谷有茶葉尾之巾
不云宗と云詩家文
茶のりてえ一は日の新
りや香や又言余院の
承安五年七月八月改元智羽
上皇六十位宣の肉後方
る康和の例は推せらる
づきの下に蒸茶の具を
羽の室度不尋あさせし
ど修久の由も仁和古
の系堂も花めもま
を取物させひし
玉海抄もるもこれぞ
宇多上皇の正遺物也

権記日記長祿元年十月
月十日出納為記遺茶不
後者今年料造進御
茶料物文若事六葉法
製遺は以は子有いと兄
由系園ハ大肉裏の時主
教寮の束にありし中
拾芥抄も出る事考るに
一条大宣の為事ありあ
きと花徳まきも盛んふ
仍りて事も字を以種
藝中書ふと云く絶
ふりて後鳥羽院建久
二年不建仁守閑山千光
國師若上傍正榮為宗

すし内於のこれ茶の子
を將來して幾茶のこれ
春振山門玉塔多聖福
寺の山内一極法と且皇
都もも寄來りて梅尾の
明惠上人は務らる上人
医師小長曾を問ひし
小茶ハ賊りを荒一氣
残曉止の故ありと昔し
久勤宗信統の脚け小
もあるべとて利梅尾よ
種られしを後宇治の
里小福一極しより古
地の里しに子息し
製造の年々に精密に成て

世小於ひあは名品出来
里より葉は日と月く
小蓋人ふあうぬ明惠上
人宇治ふ分ち裁られ
より宇治の巻民喜毎
小新茶を宇山寺小巻
來りて上人の洞堂より
供ふ中粒今あうりや
香や後世掛の立を茶
山と稱せしゆは茶由ん
又常為菓子又粒を収
ておくられし一氣今於
宇山寺小巻むといへり
因茶ハ放唐去ふり山
林の士は飲合りて

西一を正貞と成り
後ハ僧家の大倉小とを
形ひ一六茶碗のついで
米め来られ一之を後
賣茶箱収来五公也
既臨邊の清堂とあり
て今ハ玉樓令教より
柴門甘茶まで其成
貌び貴せざるあり
予嘆ふ所は茶事此
中めて煎茶の要哉
抑あふ志る一風流の
款士花雪月煎雙乃
雅玩小そあるあり
あり

脊振山の茶碗秘伝城下
あるに把茶の國との
山あり僅古ハ茶碗の山
あて有り一今ハ把茶の
山とあり

茶幼験

茶の効奏依虫ふ出於
不委去く若虫一がじ
秋夜中候ふ云茶味若
あねを飲べんを思
急を増一身を種く
眠り少く眼をぬくありと
又お茶ふよく女毒而治
腰痠利小便一云一痰熱
共渴令人少眠下丸消

食の同、水はたふ試し、死
又多く、料養百、茶を嘗め
一日中、七十毒、小過、茶
を以て、是を毎、を今人
後茶の、時茶を、飲せし
業、氣をと、解せん、とを、此れ
てあり、蘇、東坡、が、云、毎、小
食後、洗、茶、お、て、口、を、そ、び
ハ、於、穢、脱、ふ、去、て、揮、胃、お
の、成、う、う、清、一、盡、の、る、ふ
何、る、物、茶、を、汲、く、茶、く
消、て、免、へ、後、後、一、云、り
別、極、を、於、さ、び、齒、の、性、ハ
昔、を、汲、く、和、を、茶、り
よ、つ、て、益、患、密、ふ、一、と

口、終、お、の、づ、う、止、む、仍、て
人、一、日、も、茶、あ、う、う、一、む
べ、う、う、於、と、又、皆、林、五、あ、云
茶、ハ、昏、を、條、ひ、滞、り、紙
空、く、學、を、勢、め、政、城
勤、む、る、ふ、お、い、い、い、よ、く、成
力、成、助、く、東、鑑、り、云、く
建、保、三、年、二、月、廿、九、日、軍、家
右、大臣、実、朝、が、云、ハ、病、悩、て
依、人、疾、を、乞、は、し、時、茶、あ、上、
僧、正、千、光、國、師、に、加、持、り
何、復、た、は、し、う、紙、吹、本
寺、よ、り、茶、一、盞、を、石、を
せ、ん、は、因、茶、徒、を、茶、を
書、一、巻、を、紙、を、紙、を、紙、を

の茶々氣烈きふらぐり
の洗ひてしうは洗ひ極
煎法の煎へて止まらぬ
葉とていふは武夷・松
蘿・龍井・蘭葉木の商
標を以て將來する茶也
まじりて佳味なり一毫
くハ言物ふあはざるべ
焙炒とも茶を以て青丸
とてまじりて茶也
久々たるはあれは玉露
小息するも茶の味はひ
あまじりて清香なり
熟葉ありぬるはいろ
ありとも生れ氣味して

甘香あり一摘日曬ふ
て製したる下茶あり
後園製造の葉品目の
不ふ出せ山川は向背
各地の気暖ふく香味
おのゝ同ドかゞせその
名品あるは冷たき
月ひく清香なれば
可なり

茶産品目

山嶽のうろ活ふては初後の
昔茶・祖母昔・いよひの
白・玄昔・標茶・いの昔
一の白・花の白・唇ぐれ
赤の上製の條枝あり

籠かごなるぶあとかしつらひん
言ことば者もの三さん條じょう熱ねつ川がわ石いし結むすお
古こ薩さつ摩まあど人のひと珍めづ貴か
きる物ものあれども湯ゆ及およ
がが森もり森もり森もりありら茶ちや
壺つぼの中なかあありてもい温ぬる
りありあ暖ぬる成な成な成な急きゆう
に焙ほい爐ろ小せう乾かん火か焙ほい爐ろ
の火か温ぬるささがが上うへろろ火か勢せい
猛まうまままままま鳥とりれれととはは
かかららもも茶ちやとと大だい火かああひひ
一いち尺せきをを去さるるべべ磁じ籠かご茶ちや
のの籠かごあありり紙しよよくく燻くわん
壺つぼのの口くちをを密みつ封ふうしし冷れい
温ぬるままささるるべべ茶ちやぬぬるるべべ

湯ゆのの籠かごへへ二に重かさ蓋ふたああくく
氣きのの漏はらら紙し用よう白しろ唐たう土ど
あありり心こころ茶ちやをを乾かんしし茶ちや壺つぼ
のの弁べんをを周まわらら一いち団だんてて外ぐわいににおお
みみ入いるる冷れい温ぬるととああ甘かんくくとと云い
茶ちやよよくく温ぬる網あみをを透とほささししとと
ははももああるるべべままあありり

水倫

茶ちやをを好このむむ入い水みづをを撰せんむむをを
才さい一いちとと水みづよよううくくままささるるべべ
何なに禮らいのの好この茶ちやよよくくももああ
くくままささるるべべ茶ちやぬぬるるべべ
あありりもも茶ちやあありり合あとと合あぬぬとと
何なにももあありり平ひら日じつ試しささるるべべ
無む知ち過か茶ちや記き茶ちやをを烹ほうるる

伝ある地ハ角園徑身木
ある水も流れバ後合水
取ふ一何々流されども無
矢もなき不月ひくより
大橋一編一邑又市中ふ
てもよくくさくり求る時
の味分おと鳥の水に何る
おまり支もして毎晩
汲みく能く瀧一用也
又湯候法法ふそ昔紙
いそびそ貴流るふ足りぬ
古人種々水城扱が仕
仕方ハ何れどもまあとく
まろり少一但一井水
ハ二三返も砂瀧ふ一と

用也べ一江の水も大ぬ後
まどハ必瀧て用也べ一
瀧と遊ぬとまても格別
の遠ひあり又水を流ふ
る其清浄なる瀧哉用
べ一是を陰庭ふ居く
蓋を去り綿帛を収て
取後ハ夜露の氣をぬる
取よ蓋べ一水は英靈
教むべとのへりむ目の
を忌む者泉小呂後水
取白子蓋籠中既可三以
中あふその味又可洗水と
え田小白石子を籠の中
ふ入る湯を論まへむ

所あり 黄山谷が竹小湯
谷多々泉 檻石但といふ
は是より 白石河内は枚
方の 秋上坂川ありと
公唐去まての梅はは
水をとる 葱菜の用と
そ梅は久しく折えそ
愛する子あり 雪のりり
但 器は 瀧及 簾 瀧
ハ 淵 田 魚 水
又 爐 あり 記 掃 之 が 書
小 公 雪 入 穀 の 精 あり
陶 穀 學 士 雪 水 を 取 て
菓 を 烹 たり

二七

一 典 故 と 承 け 宣 文 法
雅 真 風 流 士 の 尚 ぶ 不 二
久 雪 入 一 切 の 毒 を 解 せ
春 雪 入 中 河 内 あり
七 年 系 妙 小 生 あり
凡 水 の 苦 味 を 知 り ぬ
下 立 黄 帝 より 水 瓶 一
香 小 と 系 と 味 小 生 あり
柳 子 場 通 下 あり
小 氷 つ 氷 玉 極 あり
是 序 が 考 げ 用 あり
皆 佳 あり 中 系 下 系 の
肉 まで 大 袴 あり
あり 先 入 系 申 小 陰 あり
暑 中 小 冷 あり 井 氷

あつた皆佳なるべし
但し空蔵川を船より東
の市中まで流す東の井の
山下の瀧海ふくお泉
あつた葉飲子供がし
又瀧川の船松東通りか
西葡の方流中町内は
小川延羽院川堀川の流
下瀧海水中へ水をも
どき一かきせあきま
洛東河板ありきごと
川をせ試ふ空蔵川
筋を所より三条の川
を越佳ありと又市中
あつた水あれども草
廿三

とつたふ汲はなれこれ
又用立を海河まで
嵐山近くを流す三の
流ありは水をもと長
大園利体居ても熱葉
用ひひひと又浪急
また大江の中流三木橋
の東を上首と又葉
山口流路莊木の北井水
清涼のよは水水
たまりとせなれば是
をのぞく只水たづなれ
湯の切き湯掛れを
葉の味ひ腐しとん
たびて葉はべし

茶撰

茶を煮るに籠茶よりまし
きるのれき一且強おより
浸せる茶の形状は文葉
のまゝに用紙をくくふ
造りこればよくし
古渡の茶は古に淹茶
の茶は今もよく来れど
も古代の茶はこればよく
蘇州一と巻紙箱一
古渡りの茶籠をまく
ゆありの茶師の名工ふ
様さくえく破壊の元
ゆふべー揚の紙石の蓋
め生紙と中茶よまらる

茶を煮るに籠茶よりまし
害あり一と少かた
茶をせんがれ用ひく
よる一かんとや新茶又
かまらば海を結
一と明らるる皇國
もて製造の籠茶は唐
焼をとく一系於名古の
精製長海の飛山把茶
伊多里唐津より外國
の製する茶は牧茶ごと
人々の好むに格なり
炭碗を海をば茶籠小
茶を要むぐ一湯候ひ
やまら一茶を造る

再三煮るの毎あり但一煮の葉主を二巡して
 煎茶葉を捨てる法是に
 生くは茶葉をさらし再び
 用ふるも法も必也よく
 洗ふべし高湯をそつて
 火を水まで煮下り
 濾ひ茶垢を去りて用
 盆一茶盞ハ舶来の上
 品又自國製遠精好
 降深あり水少が
 厚玉にて内を毛ふ家
 を扱ふは用由づし
 茶物も亦よ出入りの
 好しよるべし

備へる器具

火爐 風爐 湯罐

茶瓶 茶壺 水注

水杓 茶匙 茶盒

茶盞 茶籠 洗盆

水曹 茶盞 受湯

竹筒 炭

火ハ炭を良材とて粉及
 沈田炭ふまぐ物あり
 丹及より出るはこれより
 油等なるは用由づし
 炭ふよりて身元有るなり

茶の香味をそんと欲するに用之

分量

茶は分量を煮るに水一合

小茶五分とす 濃茶は

好む人の器に酌す

炒茶の量を煮るに水一合

らば又淹茶は大器に湯

をさすゆふ分量を酌

もよる 但し茶の正

より活用あるべきあり

色味ももに濃茶は

又淹茶あり

湯候

茶を嗜む人湯候を知

らんばなる湯を煮

煎茶家よて湯を煮

様なる候より湯は

さし煮火のきくありて

生茶を煮て湯を煮

茶生家よて云々

煮る湯を煮て湯を煮

ゆふ乾を煮て湯を煮

ゆて生可ありゆふ湯候

あるべし 況や何程古に

茶もよる久しき煮てバ

候も出て煮て煮茶

備が松風捨る煎茶初

急須に煎茶 煎茶と云

るハ火候をゆふと云

煎一極品も湯煎は
茶味甘く湯花も
味あり甘若く茶も
味あり甘若く茶も
湯候を得るは
湯を沸かすは
活火軍一水沸かす
と此極品も湯煎は
珠我生は湯煎は
調然とて湯煎は
松清とて湯煎は
珠我生は湯煎は
面は湯煎は
り小蟹眼も湯煎は

煎一極品も湯煎は
茶味甘く湯花も
味あり甘若く茶も
味あり甘若く茶も
湯候を得るは
湯を沸かすは
活火軍一水沸かす
と此極品も湯煎は
珠我生は湯煎は
調然とて湯煎は
松清とて湯煎は
珠我生は湯煎は
面は湯煎は
り小蟹眼も湯煎は

煎法

煎一極品も湯煎は
茶味甘く湯花も
味あり甘若く茶も
味あり甘若く茶も
湯候を得るは
湯を沸かすは
活火軍一水沸かす
と此極品も湯煎は
珠我生は湯煎は
調然とて湯煎は
松清とて湯煎は
珠我生は湯煎は
面は湯煎は
り小蟹眼も湯煎は

蒸焙する葉の重なる
冥々しく妙茶の淹せり
すしまへる葉の後火の
炙り活火の煮魚一茶
徑小魚目湧泉連珠を
収る水を煮るの旨と
攪きども近世ふてら
糲をて煮る由ふ候ひ
祝ぐく煮を収る糲
煮くく煮る由と魚目
散布微く煮くはり
を一沸と中比強辺泉
湧泉の連珠を二沸と
先終る勝波鼓浪茶
湯沸法を三沸と云ふ

入り号は老ふ似たり
攪きども嫩甘味好む
人あり又苦烈を嗜む者
あり芽葉の湯候はら
ざれば葉神透らば茶
色形もろろふ故ふ蒸
飯の捷りもふ沸はり
と嫩老各取ふは從ふ
煮く一三沸と沸るも
活火のあはざれば強
火の餘あるを活火と
その湯候形小熱く
ある時中ふ葉を入
蓋をして煮く火好
去りて煮くも直替時

去る糖の味より湯気
出ると葉がこぼれ色香
味とも不熟しこの味
ぬるを好むこれを供むべし
茶を結ぶるは後火不
て短くと結ぶ葉茶少
量に大なる火を離し
乾く程ふ入るべしと葉の
葉はよく種め煮く短
気あまの糖をべしと
但し久煮行えと煮て
梅及黒字ふあひま
温く気あまきやうやくも
は結ぶべし一等茶
葉はあまざるは結ぶ

結ぶべし若葉をば
んとあまふ小籠をば
葉茶を煮り茶碗の上
小煎湯かけ置きて
攪く茶垢を落し出
去り乾しこの茶中ふ
入る色味極めてよし
若葉を要し後漫
煮れば葉氣散る宜し
からば為國茶唐茶の
葉は氣烈しこれを洗
ひくよし一籠の茶再巡
そへし初め色嫩く氣
味あまなり再巡は味苦
烈なるなりと巡は苦く

碧くくきて喫はべも
初巡の十三夜の月とて
再巡の十九夜の月とて
三巡以後の十八九夜の
月のおととてあられも
茶味の甘くはつき苦く
烈志と流と冷と老と嫩と
各嗜む可あればくこの
法とてへへへ再巡以後
の別よりへへへ湯を
さして焙焙を調へ法む
煎一但一とて切
湯をさせば味ひまろ
かふは

淹茶

淹茶ハ小籠を洗ひ温め
乾し一巡別の去籠中へ
ハ古き茶渣も湯をわ
湯候熱しる時右仕
小籠へ湯を入り於温め
るごと即ちむり柄別ふ
湯候是にまゝる去籠ふ
蓋を取て小籠をとり
むけ蓋をとりてあられ
温めあられ候よりあられ
たふ小籠を取て茶葉
を入き湯候候き入蓋
紙をとり遊々熱せしあ
あれを供む茶葉并あ
あふ産の茶のあられ

宜しからば必淹茶ツツは
煎ツツし且蒸茶ツツハ湯ツツニ沸
の時茶ツツを入りゆツツ茶味ツツを
中ツツ熟ツツしツツ苦味ツツを去ツツ
とあり又茶ツツを入りツツ時
湯沸ツツ持ツツりて籠ツツの口より
吹ツツまツツけツツりツツあり淹ツツ
茶ツツハゆツツれツツいツツまツツとて
淹茶ツツを好ツツむツツ人ツツ々ツツ
蒸ツツむツツるツツ由ツツ淹ツツ茶ツツのツツ味ツツ
よツツ好ツツしツツゆツツゆツツをツツ要ツツと
て彼ツツ茶ツツを取ツツ捨ツツせツツるツツ
ありれ

茶葉ツツ

實ツツ茶ツツ葉ツツ上ツツのツツ下ツツ只ツツ味ツツハ

淹ツツ茶ツツのツツ味ツツをツツ用ツツゆツツべツツ
るツツ食ツツまツツべツツるツツ人ツツ々ツツ
食ツツしツツ甘ツツさツツふツツまツツづツツんツツを
茶ツツのツツ味ツツハツツをツツ害ツツせツツ且ツツ食
せツツらツツみツツらツツ志ツツらツツむツツべツツ
煮ツツ泉ツツ小ツツ煎ツツふツツ今ツツ人ツツ茶
をツツ供ツツむツツるツツ小ツツ茶ツツ葉ツツをツツ下
茶ツツはツツ亦ツツ倍ツツふツツ近ツツしツツたツツと
佳ツツまツツるツツゆツツ能ツツまツツ味ツツ
をツツ換ツツせツツるツツゆツツ茶ツツを
去ツツるツツべツツとツツ捨ツツりツツとツツいツツへツツ
甘ツツ苦ツツあツツれツツくツツ茶ツツ味ツツあり
まツツとツツ一ツツ概ツツふツツ廢ツツ茶ツツをツツ下ツツ
茶ツツ時ツツとツツそのツツ入ツツみツツりツツて
用ツツ捨ツツあツツるツツ

清賞

酒縮妓樓茶の地ふら
屯秋菊吹涼葉の席ふ
何々尺錦帷蒲蓆葉の
役ふあつた金盃玉盃葉
茶あつた尺茶具を淨
潔をせびく花錦紙書
づ尺錦葉瓊銘を排刷
善魔をさそふの世と
ともふ善賞紙行魚け
んや茶の儉情の人ふ宜
くと陸子格云々ふ
至

附云

茶畧曰烹茶之法興
陰陽五行之理相符
非惠心文人志體
不真味免隔靴搔
痒云々されば煎茶の
元勤学の人は夜ん
氣城勞せん志とせひ
て書齋中の衆ひ中
せし物あり故ふ雅
考び俗をさけてのり
ちと清雅の益を有
ゆるふ近世大いり流
初々々不学の徒
あり和漢の雅
賞合紙葉一葉後

の壽あり救壽は救
壽たるは共ざる事あり
ひらく事あり出く事あり
情欲を供へむ至死
事あり其を限をわ
んと一筆一紙ふく是
るもの紙あり身は
紙の縁がひをきつる
らば少欲知足の事
をぞ好むと云ふ事
由ふ一紙の紙を二紙
がひより紙五ツふま
れんとをばはるる他
の物をばをばはるる
たるさあやし記入り

成果行くと目の何なり
其たがひをばはるる
道具の新古優ひは
将宝紙端を其月利
の商客のたよりを
箱の裏とらあはる茶
の温かぬ茶湯のし
さびきよるは國書
数ふわらうは法陣
志くわらうげんのも
葉トウきんのもた
り足るる一紙
かへは國書その大
ゆかり魚くくく
たちぐく一唐書

